

Title	国際理解教育をめぐる今日的課題：日米文化間に生きた A daughter of the samurai の生活史を手がかりに
Sub Title	Today's problem of international education : from a crosscultural life history of "A daughter of the samurai"
Author	大西, 麻由子(オオニシ, マユコ)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1999
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.49 (1999. ) ,p.1- 9
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000049-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000049-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 国際理解教育をめぐる今日的課題

——日米文化間に生きた A Daughter of the Samurai の生活史を手がかりに——

### Today's Problem of International Education:

——from a Crosscultural Life History of "A Daughter of the Samurai"——

大 西 麻 由 子\*

Mayuko Ohnishi

The purpose of this study is to show a pitfall of international education from a case study and to consider how educational philosophy should be in crosscultural society. I argue that we must focus on the existence of cultural conflicts rather than tolerance in international education. I used the life history of a Japanese woman, Etsuko Sugimoto, who experienced crosscultural conflict in both Japan and America during the Meiji, Taisho and Showa eras. She wrote an autobiography called *A Daughter of the Samurai* in English in 1925 and called 'a citizen of the world' in the US.

From the autobiography, we learn that crosscultural understanding and a creation of new aspects for international society come after a overcome dilemma and crisis of identity. Based on hardships of crosscultural understanding, we must draw attention to cultural conflicts and reflection more for international education.

### はじめに

現在の日本の国際理解教育においては、エスノセンタリズム（自文化中心主義）の警告は必ず発せられ、異なる文化に対する「寛容」の姿勢とともに、国の枠を超えた「地球市民」の育成が近年特に強調されている。エスノセンタリズムに陥るのを避ける道具として文化相対主義が使用され、異文化は外在的な標準によって判断すべきではないという共通認識がそこにはある。国際理解教育の多くの場合において、文化相対主義・価値の相対化が掲げられ、かつ、全世界が普遍性を追求することが大きな目標となっている。しかし、一方では普遍性追求をめぐって倫理的判断は文化的境界を越えて行ってもよいとする考えが沸き起っていることも事実で、「相対主義の提起する厄介な問題は都合よく無視するという形で相対主義を認めたり、認めなかったりする… いかにも

場当たりの方法<sup>1)</sup>」と非難させる問題が根底に潜んでいることを忘れてはならない。

しかし、このような問題があるにせよ、文化相対主義 VS 反文化相対主義、文化の違いを乗り越えられないという立場 VS 乗り越えられるという立場などで、二者択一の議論に帰結させることは、今日、有意義であるとは思えない。むしろ、矛盾ともいえる相反した考えが併行して現れる葛藤状態の複雑性を理解し、その葛藤に対自できることが、国際社会に生きる人間に必要なのではないかというのが目下の私の主張である。

本研究の目的は、実在の人物の葛藤を生活場面レベルで描き出し、上記した問題の再確認をすると同時に、地球市民の資質と育成について考察することにある。この目的のために、手がかりとなる対象として日米の文化間に生き、日本人である自分を意識しつつ葛藤を続け、かつ「世界市民」とも呼ばれた経歴をもつ杉本鉞子（すぎもとえつこ）という日本女性を取り上げる。その理由のひとつは、この人物の手記には異文化接触時の葛藤が日本文化習得と重ねて述べられており、70年以上に渡る

\* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻修士課程修了（異文化間教育、教育学）

長期スパンの資料が残されていることにある。それに加え、明治初期に封建的な「武士の娘」としての教育を受けたこの無名に近い日本女性が、アメリカにおいて一部の地域にせよ中学生向けの本に「世界市民」と紹介されていたことは非常に稀有なことであり、時代を越えた地球市民の資質の検討への手がかりとして役立つと推測したのである。

本稿では、はじめに先行研究および国内外の新聞・雑誌でなされた杉本鍼子の評価等を集めてその特徴をまとめ、次に主に杉本鍼子の自伝 *A Daughter of the Samurai*<sup>2)</sup> (『武士の娘<sup>3)</sup>』) から彼女の葛藤を抜き出して考察していく。最後に全体の考察を通じて今日の「地球市民」と国際理解教育を考える。

## 第一章 *A Daughter of the Samurai* 杉本鍼子

杉本鍼子の経歴を述べる。彼女は、1875年に越後(新潟県)の長岡に生まれ、長岡藩の家老稲垣平助の娘として、習字、なぎなた、四書(大学・中庸・論語・孟子)を学び、古風なしきたりのもとに子供時代を送った。だが、アメリカに渡った兄の恩人である日本の骨董を扱う米国在住の日本人男性との結婚が突然に決まり、準備として東京のミッション・スクールに通った後、鍼子は米国オハイオ州のシンシナティに旅立つことになる。鍼子の夫・杉本松之助の店に訪れていた日本文化に興味を抱く28代の米国の大統領トーマス・ウットロー・ウィルソンの親類にあたるウィルソン一家と親しくしながらの米国滞在は12年ほど続くが、夫の急死によって日本へ帰国。日本では公娼の廃止を訴えた矯風会に所属する。米国で恵まれた娘二人の教育の問題などを熟慮の末、1916年、再びアメリカの地を踏む決心をした鍼子は、生計を立てるためにペンをとる。原稿は送り返されることも多かったが、地道な執筆活動等が認められ、家族らと共にニューヨークに移っていた彼女は、コロンビア大学に小さいクラスとはいえ日本語や日本文化を教える初の日本人講師(1920-1927年)として迎えられる。米国滞在中に日本のことを質問されることの多かった鍼子は、日本のことをもっと知ってもらいたいという動機で、雑誌ASIAに自らを描いた英文 *A Daughter of the Samurai* を連載した。その *A Daughter of the Samurai* は、1925年に単行本になると、日本の姿を知る手がかりとして好評を博し、後に計8ヶ国語で読まれ広く知られるようになっていく<sup>4)</sup>。1927年からは日本に留まり執筆を続け、冷戦の時期には満州事変を話題にした日本の有り様を描いた *Grandmother O-Kyo*<sup>5)</sup> (『お鏡お祖母さ

ま<sup>6)</sup>』) を出版。鍼子のその他の著作はほとんど知られておらず、めざましい活躍はないが、1950年に肝臓癌で亡くなったおりににはニューヨークタイムズが死亡記事を載せている。

*A Daughter of the Samurai* がニューヨークで出版された1925年当時、知識も少なく、誤解されることが多かった日本の姿を日本人自らが英語で直接伝えるということは非常に珍しいことであり、時代状況を考えても大変な勇気のいることであった。その頃の西欧諸国は、1905年に終結した日露戦争で大国ロシアに勝利した日本に対し、驚異を抱き始めていた。特にアメリカでは、日本人の移民は低賃金で勤勉に働くが、アメリカに同化せず、出稼ぎで稼いだお金をほとんど日本に送金していたことへの不満や、黄色人種が白人の文明を破滅させるという「黄禍論」が騒がれ、1924年には排日移民法が制定されていた。そんな折、杉本鍼子は *A Daughter of the Samurai* によって、海外では「極東から来た最も高貴な申し分ない日本の説明者—interpreter—のひとり<sup>7)</sup>」として人びとに受け入れられていった。

*A Daughter of the Samurai* には、鍼子の郷里での思い出が日本の風習・精神を盛り込んで語られているだけでなく、ミッション・スクールや米国での暮らしにおける戸惑いが丁寧に描かれ、異文化理解に対する謙虚な姿勢が貫かれている。日米のどちらか一方のみの肩をもつことなく、問題の解決に静かに挑んでいく姿は好感を得た。ニューヨーク・サン紙<sup>8)</sup> は、「日米両国民は必ずしも常に相互の理解を得ているとはいえない。『武士の娘』は両国民のために有力な調停者になった。英国東宮殿下が英国最良の大使というならば、著者杉本夫人は将に日本最良の国使である」と報じている。1925年11月22日の *New York Herald Tribune Books* においては、彼女は、「封建主義の美しさと近代的アメリカの自由の両方を知り、そして愛している」と紹介されている。また、1933年3月10日のロンドンの *Times* では“A Modern Japanese Woman”という見出しの下に書評がはじまり、ここでも封建と自由、Feudal AmericanとModern Japanese、日本とアメリカ両国への忠誠心(double loyalty)といった表現が使われた。いうならば、これらには、異文化に対する理解と二つの文化が緊張をはらみつつもある形で均衡を保っている鍼子の性質が認識されているのである<sup>9)</sup>。

海外で高い評価を得た *A Daughter of the Samurai* ではあるが、日本においては当初ほとんど注目されなかったといっている。故郷の地方紙・『北越新報(現 新潟日

報)』には、日黒眞澄によって翻訳が1929年になされたものの、河井継之助が英雄としてあがめられた当時、長岡藩の家老の娘に好意を寄せる者は少なく、彼女の功績を快く思わなかった者もいるらしい<sup>10)</sup>。単行本として日本語版(大岩美代 訳)が出版されたのはずっと遅く、1942年である。しかし、なによりも注目度の違いを生んだ理由は、日本においての *A Daughter of the Samurai* が、日本を知る道しるべの役割を担うわけではなく、「杉本鉞子の独白」として受けとめられたからであろう。

鉞子は、日本ではむしろ「アメリカの説明者」となった。彼女は、日米の関係が徐々に怪しくなりはじめていた1940年の1月より「武士の娘」の見たアメリカ」という記事を『婦人之友』に掲載する。米国への敵対心をあおることがジャーナリズムの常識であった最中、鉞子はアメリカで日常出会った素顔のアメリカ人を描き、東西の交流の喜びを表現した。『婦人之友』の主筆、羽仁もと子が鉞子に連載を依頼した理由は、鉞子の繊細な感受性と観察力が、冷静公平ではない当時の日本の「逆上気分」の国民に涼風をもたらすことへの期待であったという<sup>11)</sup>。この連載の人気はほどは判らないが、その後もたびたび『婦人之友』に鉞子の記事は載せられていた。

杉本鉞子の分析・研究として数えられるものは多くはない。1944年に「日本人がどんな国民であるか解明するため」にアメリカ政府から依頼を受けたルース・ベネディクトは、その著 *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture* (『菊と刀—日本文化の型—』)の中で、*A Daughter of the Samurai* を引用し、日本人の「自制の精神」「実例や模倣による訓練」「責務を履行する責任」等を考察しており、*Grandmother O-Kyo* も用いて日本の教育の特徴を探っている<sup>12)</sup>。ベネディクトは、日本文化の型のひとつに「針金の輪をはめこんで、正しい位置」に保たれている「菊」を選び、鉞子を「針金の輪を取り除く機会を与えられた」人物と表現している。副田義也は、ベネディクトの鉞子の分析に対し、日米文化の差異を強調しすぎていることを指摘し、鉞子の自己抑制を美德とする価値意識は、いくつかの局面で支持したり、支持しなかったりの矛盾した感情があったとして、感情・表現・行動の関係から論じた<sup>13)</sup>。

国際化社会が浸透し出すと、鉞子は誇るべき先駆者としてクローズアップされはじめた。1967年には『郷里にかがやく人々』のひとりとして、地元の小学校6年生用の教科書にも載せられている<sup>14)</sup>。その記述にあたった内山喜助は、鉞子の生涯を讃え、魂は「長岡に帰っていっ

た」と帰結させた。

高見沢潤子は、『20人の婦人たち』のひとりに鉞子を入れ、「日本女性について、特に武士のきびしいしつけについて、世界に知らせた人」と捉え<sup>15)</sup>、佐々木美智子は、鉞子を「日米文化交流の先駆者」「日本とアメリカを結び架け橋」と呼んだ<sup>16)</sup>。

平川節子は、『比較文化研究』の中に英文と邦文の比較もまじえ、「アメリカと日本における杉本鉞子の『武士の娘』」を載せた。平川は、鉞子を「日本人像の形成に手を貸した作家」として取り上げ、「アメリカに忠実な市民」よりも、「日本のために書く愛国者」と表現している<sup>17)</sup>。それに対して、多田建次は、鉞子を「二重国籍」をもち、東西の文明を一本ずつの足で踏まえて立つ「二本足の学者」であるといっている<sup>18)</sup>。多田は、「対象の実像を正確に把握すること」ができた人物として、福沢諭吉との共通点を述べながら鉞子を分析した。

杉本鉞子に関する資料を掘り起こす作業をしている地元の主婦のグループ・長岡史楽会では、『武士の娘』の中にはひとつも描かれていない矯風会での鉞子の言動を調べ上げ、日本女性への啓蒙の様子を紹介した。このグループから独立して研究を続けている青柳保子は、雑誌ASIAの掲載写真の解明、『武士の娘』の登場人物(父稲垣平助、フローレンス・ウィルソンなど)の情報を補足し、自伝に書かれていることの実関係を確認している。青柳は鉞子を「武士の娘というアイデンティティを損なう事なく調和した境地」を作り出したと評価した<sup>19)</sup>。

新潟テレビが制作した『杉本鉞子の生涯』は、再現ドラマ仕立てで、アメリカでの活躍を中心に描かれている<sup>20)</sup>。その中で、鉞子が暮らしたオハイオ州シンシナティの大学教授は、鉞子を武力なくして名誉と尊敬を得た「平和主義者」と述べている。

郷土研究として取り上げられることの多い杉本鉞子研究に、鉞子に対する批判的な見方が少ないのは当然かもしれない。だが、米国での評価の方が郷土よりさらに高いといえそうだ。前掲『婦人之友』の掲載記事を談話筆記としてまとめた編集者の渡善子は、冷戦時には「国際人」ゆえの苦悩があったという鉞子の人となりを書き記しているが、渡によると、米国の青少年読本の『偉大な開拓者たち』という本は、ワシントン、エジソンらとともに杉本鉞子を民主社会開拓の貢献者に数え、その鉞子のところは「よき世界市民であるということは、決してその人物の愛国心の欠除を意味するものではない。むしろそれは、単なる愛国心より、'高度の愛国心' というべ

きである、自分自身の見解同様に、他人の立場見解をも、よろこんで知ろうとする、冷静寛容な態度をさすのである」と結ばれているという<sup>21)</sup>。

以上の先行研究や資料より、杉本鉞子が日米両国の価値観を相対的に判断をした調停者といえる一方で、高度の愛国心と表現されるような文化を越えた普遍的価値を追求したという両面を持っていたであろうことが認められた。このように、やはり矛盾とさえ考えられる複雑な価値観が存在しているのである。

先行研究においては、杉本鉞子の生きてきた結果としての偉業を讃え、「日本とアメリカを結ぶ架け橋」「国際人」などと表現するものが多い。しかし、ごく普通の日本女性ともいえる杉本鉞子が、そこまでの境地に達するまでの経過や素因を論じる研究は少ないため、しばしばそれらの表現が説得力を持たない。本研究では、杉本鉞子をむしろ「葛藤から逃げなかった人」と呼び、彼女の高い評価を得るにいたった原因のひとつを「葛藤に対する力」と仮定し、異文化接触場面から葛藤のプロセスを追って考察し、今日の国際理解教育への新しい提案ができればと思う。

## 第 2 章 A Daughter of the Samurai の葛藤

### 第 1 節 文化の無意識性の発見と自問

杉本鉞子は渡米の準備として、東京の米国メソジスト系のミッション・スクールである現在の青山学院の源流となる海岸女学校(予備科)・東京英和女学校(本科)に通った。鉞子の価値体系に影響を及ぼした文化比較の視点はここにはじまるといってよいだろう。

ミッション・スクールの思い出の中では、時間の経過による心境の変化が多く語られる。6才の頃より厳格な師につき、「三尺下がって師の影を踏まず」と教えられてきた鉞子にとって、外国人の先生が気軽に生徒に応じ、作法や威厳に欠けることが気にかかっていた。しかし、外国の先生と親しんでいくほど、「教育者という名誉ある地位と、陽気な性格とが、何も矛盾するものではないことが、次第に理解されるように<sup>22)</sup>」なった。そして、同時に日本の先生の近寄りた親しみに欠ける部分を感じるようになった。

ある日、外国の先生が寄宿舎の本棚から鉞子の愛読書『八犬伝』を「ためにならないから」(they are not proper books for you to read<sup>23)</sup>)と言って取りあげられたことで鉞子は混乱する。なぜなら、鉞子には、幼少からなら疑問もなく受け入れてきたものが突然否定される理由がわからなかったばかりか、「仁義礼智信等八つ

の徳を象徴する八犬士の伝奇的な物語がいけないといわれ、英文学でたびたび読んだ、動物を人間化した寓話や童話をよすとされるわけが、どうしても理解でき<sup>24)</sup>」なかったのである。だが、「長い間いろいろ考えた末、思想も言語と同様に、ある国では率直で平明であり、他の国では、漠然と神秘的、夢幻想であるということに思い当た<sup>25)</sup>」った鉞子は、文化固有の考えや表現があり、思想の理解は容易できないことを知っていく。

異文化との出会いによって、価値の相対化をしていく機会を与えられるだけでなく、自分のあり方を見つめ直すこととなり、自問が繰り返されていった。たとえば、鉞子にとって、日本の花嫁は「困難にも耐える」雪を凌いでさく「梅の花」にたとえられるのに較べて、ミッション・スクールの先生は「桜の花」で、それは「美しく」「萎れることのない」、そよ風に花卉を散らして「浮き雲の眺め」を添え、地面に散っては、桜貝の敷物にも表現できる「変化のある」美しさにたとえられるものであった。「比較をしながら両者の特色をいろいろと思い較べる」鉞子は、「いずれかを学ぶべきかについて見極めを得るにはずいぶん時を要し<sup>26)</sup>」ており、「心の中では無言の質問が幾度も繰返された」のである<sup>26)</sup>。

むしろ、アメリカに渡ってからも鉞子は考えさせられることが多かった。ある日、隣に住むアメリカ婦人に日本の移り気な娘を戒めた昔話を例にとり、女が淑やかな慎みを失ってしまつて真面目な恋人を敬わないようでは、女らしい女ではないという日本で教えられてきた教訓を語ったところ、それでは男が女を捨てたら男としての価値がなくなるのか、というその婦人の反問に鉞子は答えに窮してしまう。鉞子は言う。「(そのアメリカ婦人とは)心を割って話しあいましたが、その質問や批評に、ある時は驚き、ある時は困らされたことがありました。私は日本の習慣の多くを、あるがままに受け入れており、ご先祖さまもこうなされたし、今でもそのままに行われているのだと想う外に、別に深くも考えてみませんでした。そして、賢明な為政者がお定めになった法律に叶っている故に、正しいことだと思っていましたことなどを、問題にしてみますと、自身で判らなくなつてしまい、あわてたこともございました<sup>27)</sup>」

ここに見られるように、無意識のうちに自分がその中に組み込まれてしまつている文化というものの発見や疑ったことのない自文化の価値を鉞子は自ら再吟味している。鉞子は頭の中が変になりそうになったこともあったと書いているが、葛藤を引き受けてひとつひとつ解決する努力を試み続けていたのである。

## 第2節 新しい価値に対する問い返し

鉞子にとって全く新しい価値観であった「自由」の出現に、どのように対処したかについて述べてみたい。鉞子がミッション・スクールではじめから無条件に気に入っていたものは、校舎をとりまく木が伸び放題、雑草が茂り放題に任せてある庭であった。故郷の庭はいつも人の手によって整えられていたのに較べて、「学校のは全くこれと違い、何もかも自由自在に、清新の気に満ちていました。今までの生活と正反対のこの生活を、庭木にみるようにも思い、私はその幸福を心ゆくまで味わうと同時に、人の心の中にもこんな幸福があることを思って、生々した気持ちに満たされました<sup>29)</sup>」と鉞子は感じる。生徒各自に庭の小さな一区劃が与えられ、生徒各々が好みの種を買ってもらった時の感動を鉞子は次のように述べる。「すくすくと自由にのびた木々や、茫々と茂りあった雑草に心ひかれていた私は、この新しい土を与えられて、個人の権威というようなものを感じました。伝統を破ることもなく、家名をけがすこともなく、親や師の心をいためることもなく、世界中の何ものをも損なうことなく、私は自由自在に行動できるのであります。(中略)こんな途方もない行動が与えた自由奔放な感じと、その結果がどのようなものであったかは誰知るよしもないことです。唯、私の魂の束縛を解き、立って耳を傾けますと、野に生うる木や草の如き自然な笑いと儀式ばらない動作、率直な言葉や表裏のなき思いの不思議に錯綜したところから、自由の精神は、私の心の扉を叩くのでした<sup>29)</sup>」

ベネディクトは、まず「自由」と出会った時のこの鉞子の感情表現部分を引用して、「全く純粋に天真爛漫に、自分の欲するままにふるまうことが、どんなに日本人を有頂天にさせるものか<sup>30)</sup>」と分析した。「この針金の輪を取り除く機会を与えられた時の杉本夫人の興奮は、幸福な、また純粋無難なものであった。今まで小さな鉢の中で栽培され、その花卉をひとつひとつ念入りに整えられてきた菊は、自然に帰ることの中に、純粋な喜びを見いだした。しかしながら、今日本人の間では、『期待はずれの』行動をし『恥』の強制力に疑問を抱く自由は、彼らの生活様式の微妙な均衡を覆すおそれがある。彼らは新しい局面のもとで、新しい強制力を習得せねばならないであろう。しかも変化は高価につく。新しい仮定を作り上げ、新しい道徳を樹立することは、容易なわざではない<sup>31)</sup>」

これは、ベネディクトの新しい価値の出現が及ぼす影響に対する日本人への警告ととれるが、鉞子において

は、新旧の異なる価値の位置づけ、異質なものに対する受け入れには慎重であった。幼少から精神の抑制を第一に教えられた鉞子は、「自由」という価値観を学びとる精神の過程において、まるで両極に感じていた「自重」と「自由」に新しい結びつきを見つけ、穏やかに受け入れていったのだ。かねてから、女は「穢れたもの」としての運命を背負わなければならないという教えに疑問を持ちながらも、祖母、母から受け継いできた忍従の徳によって受けとめていた鉞子は、様々な経験を通じて「自由」を以下のように表現した。「女とて、女の道を失いさえしなければ、心の中に毅然たる思いを抱いていてもよいのだと、思い当たりました。こんなことを思いついた夜、私は日記に、次のようなことを書きつけました。『徒らなる犠牲に甘んじては、唯溜息がでるばかりであり、自重は自由と希望に通ずるものである』<sup>32)</sup>」

上記では、先祖から伝えられてきた「女の道」を失わず、かつ、侵されることを許さない「個人の権威」として自由に思いを抱くことは可能であるという新旧の価値の両立を思いついたのであろう。だが、長い月日を経て後、再び問い返し、「真の自由」の解釈を以下のように語っている。「私は女の尊さを悟るにつれ、自由を愛し自由に向かって進む権利を信じていたのは若い頃のこと、真の自由は、行動や言語や思想の自由を遥かにこえて発展しようとする精神的な力にあるのだということが判りました<sup>33)</sup>」

このように、鉞子は自分の心に変化を及ぼした新しい価値観については、幾度も自己に問い直し、自文化と照らし合わせながらその真の姿を理解するように慎重に努めていたのである。

## 第3節 普遍性を信じて

問い返し続けた杉本鉞子ではあるが、常に異文化との間で葛藤の状態にいたわけではない。ある価値観については、鉞子は堂々とこれを批判し、否定した。前出の *New York Herald Tribune Books* は、*Feudal American* という見出しで、「ついにアジアもヨーロッパのようにアメリカに率直な意見を述べるようになった」と切り出して書評を載せている。その書評の原因とも考えられる例をあげると、鉞子にとって、威厳も教養もあるアメリカ婦人の「金銭に対する不真面目な態度」は受け入れられないものであった。夫にねだったり、友人に借りたり、秘密で貯金したり、恥づかしい立場にまで身を置いてまで金銭を得ようとするのを鉞子は非難した。そして、日本では「夫の働きにより、妻は銀行家」になり、

「夫に地位相当の支給ができるのを妻は誇り」として、「もし妻が妻の務めに失敗すれば、夫は軽蔑される」のであり、「責任ある地位にあるものの常として、その務めは、立派に果たしたい」と思っていることを読者（アメリカ人を想定）に伝えた。彼女は、異なる価値観の存在を異文化の人びとに提示することを臆さないばかりではなく、多様な価値観の中での価値選択の必要をもせまっているように感じられる。そこにおいては価値の相対主義を認めようとする態度はない。存在するのは、文化の境界を越えた価値の善悪に対する追求の姿勢である。

批判の目は、当然日本にも向けられた。アメリカ帰りの鉦子は、長く続いた日本の廃娼運動の中心となった基督教婦人矯風会に 1911 年から数年間参加していた。鉦子の矯風会の使命に対する認識は、「神の喜び給わぬ不義」と戦い、「愛の働き」で国家を高め、自らを開拓し、男子を助けるために「骨折り」をすることだった<sup>34)</sup>。

異なるものへの「客扱い」の態度も否定されるべきものに数えあげられた。母校の『校友会会報』第 33 号 (1928) の鉦子の寄稿には、日本の先祖代々から受け継がれた異なる人に対する極度の「遠慮気質」が、過剰な外国崇拜や理由のない「毛嫌い」の弊害を及ぼしていると語られている。彼女は、異なるものとの価値観の対立を必ずしも避けなければならないものとしてではなく、必要なものとして捉えているのだ。この『校友会会報』で、鉦子は異文化の人々の、長所だけでなく短所も互いに解り合うことが大切であり、人間は「美」だけではなく、「苦」も引き受けられる存在であり、それでこそ真の理解ができることを説いている。

異文化との対立を覚悟しながら、鉦子は互いに共通する普遍的価値を信じた。鉦子が 1948 年に友人にあてた手紙<sup>35)</sup>に以下の記述がある。「(前略) 何れの国人も心を知り合いますとあまり違う点もないことと、私は長い外国生活でかく信じて居ります。私の不思議に感じます事は、いかなればいくさというものの人間社会から去らぬことでございます。お互い様にいくさの原因をさぐりこれをかりつくすようにつとめましょう。(後略)」

また、1950 年 6 月 4 日の朝日新聞からも、彼女の普遍性を信じる心が感じられる。その記事では、冷戦後初めて英国版の *A Daughter of the Samurai* が再販された知らせが、メッセージを添えて実物の本とともに、鉦子が亡くなる 2 週間ほど前に彼女のもとに送られてきたことが伝えられている。鉦子は福沢諭吉の孫と結婚した次女の千代野の宅に居て、かなりの病床の身であった

が、次のようにコメントしている。「私の本が再販されて広く世界の若い方に読まれるのはうれしいことです。今の日本の若い方にもぜひ読んでいただきたい、世界でも最も封建的といわれる日本のサムライの娘の物語にも民主主義の人々の心をうつすものがあるのです。」

普遍性を求める心こそ彼女の葛藤の源であり、その普遍性の発見と異文化理解の困難を彼女は知っていたのであろう。*A Daughter of the Samurai* は、再渡米の出発前夜を最後に、異文化理解の難しさを余韻に残して終わっている。最終章は〈黒船〉と題され、祖母との幼い時のやりとりを通して、幻想的に物語りが閉じられる。祖母は幼い鉦子（エツ坊）に、黒船に乗った赤ら顔の異人は「神国日本」にやってきて、日本の美しい芸術を理解せず商人のようなことばかりいって、日本人までがそれに似てきてしまったのだと話す。「船は互いの国を近づけるものですと先生はおっしゃっていましたが」というエツ坊の問いに、祖母は姿勢を正してこう答える。「エツ坊や、異人さんと神国日本の人々がお互いの心の中が判りあうまでは、何度船が往来しても、決してお国とお国とが近づきあうことはありませんよ<sup>36)</sup>」

そして鉦子は、共通するところがあっても、それはまだ「大方の東洋人にも西洋人にもかくされた秘密<sup>37)</sup>」であり、秘密がかくされたまま船の往来は「絶えることはありません<sup>38)</sup>」と結んでいる。

### 第 3 章 地球市民の育成

「地球市民の育成」の研究に従事している箕浦康子は、「人類の一員、地球市民」の意識を育てることを自己概念の枠が拡張することと捉えた授業プログラムを紹介するなかで、自己概念の質的転換においては、二つの相反する価値の対立とジレンマに直面することを分析結果として出した宇土泰寛の研究に注目している<sup>39)</sup>。「価値ジレンマを経過して、はじめて地球市民としての普遍的価値が形成されるプロセスが興味深い<sup>40)</sup>」という箕浦の意見は、紹介してきた杉本鉦子の生活史での葛藤の経過から支持したい。さらに本研究では、その価値ジレンマは、無意識下にある保身のための対立拒否からくる「同調」や「遠慮気質」からでは発生しづらいのであり、その結果、普遍的価値の形成は困難になるとつけ加えたいと思う。

「地球市民」の議論の中で、日本の国際理解教育の第一人者の小林哲也<sup>41)</sup>は、人間集団を「われわれ」「かれら」というように区分する「民族」の歴史的概念を踏まえ、「民族だけが人々の唯一の拠りどころであった時代は過

ぎたのではないか」と述べた。小林は、「民族以外の枠組みのなかで、『われわれ』として共通な意識を分かち合い、共生できるはずである」とした。この意見は、いわば地球規模で普遍的価値の追求を促す考えであるが、しかし、他方で「脱固有文化」志向とも考えられ、「われわれ」「かれら」としての固有の文化の尊重の問題に微妙にかかわっているといえる。杉本鍼子は、ある時は「西洋は西洋、東洋は東洋」と言い「われわれ」と「かれら」を文化固有のものとして区別し、またある時は「西洋も東洋も人情に変わりがないことを知った<sup>42)</sup>」と言って共通性を述べた。「われわれ」と「かれら」の枠は容易にはずれず、価値ジレンマがあってしかるべきであり、それを認識し、葛藤を受けとめ、耐えうる力をつけることが、地球市民の育成にむしろ必要なのではないだろうか。

一方国際理解教育にまつわる理念は時代につれ変化している。アメリカでは、個々の姿が全体に溶けてよくわからない「メルティングポット」という表現の立場から、多文化教育に代表される多様性を認める「サラダボール」へ変革が求められてきた。しかし、「サラダボール」的な文化相対主義を奨める一方で、民族・文化がバラバラの特色を持つことでの国家の不安定、無秩序を統合するひとつの「ドレッシング」が必要となるというような、結局はある種の同化政策への逆戻りの問題が起きているのである<sup>43)</sup>。

国際社会において、ひとつだけの文化の中で生きる人間もいるだろうが、いくつもの文化に生きる人間は確実に増えている。その場合、自文化と異文化の境界に立ちながら新しい文化を発展させることができる「マージナルマン（境界人）<sup>44)</sup>」が出現することになる。「デラシネ（根なし草）」と呼ばれる自文化をなくして漂う人間とは異なり、マージナルマンは、民族の過去や伝統と縁を切ることが許されていても、自らすすんでそうしようとはしないため、自我の分裂・葛藤を引き起こす。葛藤に耐え、自問し深く考える者は、価値体系の揺らぎを受動的に受け入れるのではなく創造性を発揮していくが、他方、価値の混乱によって精神的に病んでしまう者もある。既成の価値観に縛られず、価値ジレンマに耐え、新しい文化を造り出すことは容易なことではないのである。

杉本鍼子を、咸臨丸での渡米において「驚嘆の洗礼を創造的思考へと昇華させた（福澤）諭吉<sup>45)</sup>」と同様、異文化接触の歴史上「注目すべき対応」をしたとする紹介がある。価値観の錯綜する社会においては、「価値基準が固定化することなく、一旦はバラバラに解きほぐし、試行

錯誤をくりかえしながら、具体的な状況の中で、おのれの価値体系をあらためて編成しなおす手続きが、不可欠となる<sup>46)</sup>」のであり、その「強靱な精神力・柔軟な思考力をもってはじめて可能な」段階まで達し得た人物と見られたのである。杉本鍼子が、価値のジレンマに耐え、自我の崩壊の危機を乗り越えて、新しい創造への道を切り開いたとするならば、彼女の「葛藤に対自する力」が今日の「地球市民」の資質となりうるのではないかと思う。

もちろん、杉本鍼子が完成された「地球市民」というのではない。「地球市民」に必要なと思われる一部の資質が彼女にあったにすぎないのである。自伝を通じて、「武士の娘」という階級意識が彼女にあったのは事実である。また、「武士の娘の見たアメリカ」の中では、アメリカのニューヨーク州のタキシード公園には豪邸が建ちならば、そこでは規定どりの紹介のある者のみが入ることを許されていたと語り、「常々デモクラシーを誇る米国にも、やはりこのような貴族的な場所もあるのを見ます時、何というても人間の気持ちというものに、さほどのかわりはないものだと感じさせられました<sup>47)</sup>」と述べている。その時代、「武士」という名譽ある階級の娘であった彼女にとって、「身分」という考えは常にあった。たとえばその武士の娘としての名譽が、葛藤に押しつぶされたいための彼女の支えになっていたとしても、今日において「地球市民」を語る時、階級意識は外に追いやられるべきものであるはずである。さらなる地球市民の資質の歴史的発掘と未来への模索は必然といえよう。

## おわりに

「地球市民」のメタファーは、分かりやすく耳に快く響く。したがって、誰もが同じ地球の一市民であるだけに、安易に文化の違いは乗り越えられると考えたり、無意識に自己の標準を絶対とすることも起こりやすい。だからこそ、異なるものを理解することは非常に困難であることを自覚し、葛藤を引き受けられる精神を培うことが、国際理解教育に求められるべきであることを再認識しなければならぬと考える。

国際理解教育において、異文化に対する知識の獲得も必要であるが、文化の狭間に立ったとき慎重に忍耐強くひとつひとつの問題に対処していく能力の育成は不可欠である。だが、その方法論は発展途上にあり、また、教科の枠組み内の国際理解教育のみで詰め込みはしないであろう。もっとも摩擦や葛藤に向かっていくことのできる知恵と勇気は、国際理解教育のためだけに特別に叫ば



れる資質ではない。1996年のドイツの常設文部大臣会議勧告<sup>48)</sup>では、異文化間教育<sup>49)</sup>の理念が生徒が身につけるべき基本的価値として位置づけられている。異文化間教育で説かれている文化的規定性の意識化・自己理解・多様性の中に一致と統合を求める態度の養成などが、人間の尊厳と基本的な権利の擁護というドイツの憲法の規範を受けた教育課題として述べられているのである。日本では、1987年の臨時教育審議会で「国際化への対応のための改革」が提言され、1989年の学習指導要領には「国際社会に生きる日本人」を前提に国際理解教育の重要性が明記されている。だが、語学やコンピューター技術の習得、環境問題への取り組みが先行するなか、葛藤に向き合わせ、ものごとの決定における自己責任の自覚を促し、さらに反問していく能力を引出していくことに対し、教育をする側はどれだけの意識を持っているのであろうか。

本研究では、ケーススタディを手がかりに21世紀に向かう国際社会において葛藤や複雑性に耐える精神力が必要となることを強調してきた。しかし、現代の日本では、相手との関係の「やさしさ」を求めて、対立や葛藤、複雑性を避ける傾向が指摘されている。葛藤を避けた関係で結ばれた絆では、その結び目は緩く頼りないはずである。異文化に対する興味関心を発展させるのみならず、葛藤を避けず、自己に向き合い、答えの見えないものに挑戦できる能力の育成が、今こそ待ち望まれている。

#### 註

- 1) Hanson, Allan, *Meaning in Culture*, Poutledge & Kegan Paul, Ltd., London, 1975. ハンソン, アラン (野村博・飛田就一 監訳), 『文化の意味—異文化理解の問題—』, 1980, 法律文化社, pp. 87-88.
- 2) Sugimoto, Etsu Inagaki, *A Daughter of the Samurai*, E. Tuttle, Tokyo, 1995.
- 3) 杉本鉞子 (大岩美代 訳), 『武士の娘』, 筑摩書房, 1994.
- 4) *A Daughter of the Samurai* は、1930年にフランス語版, 1934年にスウェーデン語版, 1935年にドイツ語版, 1937年にデンマーク語, フィンランド語, ポーランド語版が出版され、西欧において広がりを見せるが、日本語版が出たのは1942年になってからである。
- 5) Sugimoto, Etsu Inagaki, *Grandmother O-Kyo*, Doubleday Doran, New York, 1940.
- 6) 杉本鉞子 (大岩美代 訳), 『お鏡お祖母さま』, 実業の日本社, 1941.
- 7) 1934年にダブルデー・ドーラン社から出た, *A Book of Great Autobiography* (『卓越した自伝の本』) では、ヘレン・ケラー他8名の自伝とともに、『武士の娘』が収められた。その序での表現から引用。平川節子, 「アメリカと日本における杉本鉞子の『武士の娘』」, 東大比較文学会編, 『比較文化研究』1993年6月号, 恒文社, p. 42を参考。
- 8) 北越新報 (5/18/1929) の記事「長岡の落城と英文『武士の娘』に就いて(2)」から目黒眞澄の訳を参考に引用。
- 9) 二つの文化を合わせ持つこのようなパーソナリティは「バイカルチャル・パーソナリティ」と呼ばれている。江淵一公, 『異文化間教育学序説—移民・在留民の比較教育民俗誌的分析』, 九州大学出版会, 1994, 115-120を参照。
- 10) 1929年6月19日の『北越新報』の読者のページを参照。
- 11) 渡 善子, 「杉本鉞子—『武士の娘』を書いた作家—」, 『越佐が生んだ日本の人物』第3集, 新潟日報社, 1967, pp. 116-117.
- 12) Benedict, Ruth, *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*, Charles E. Tuttle, Japan, 1992, pp. 268, 280-282, 294-298を参照。
- 13) 副田義也, 『日本文化試論—ベネディクト「菊と刀」を読む—』, 新曜社, 1993, pp. 363-373を参照。
- 14) 内山喜助, 「杉本鉞子」, 『郷里にかがやく人々』青少年育成新潟会議, 新潟県教育委員会, 1967年, pp. 42-49.
- 15) 高見沢潤子, 『20人の婦人たち』, 教文館, 1969年, pp. 162-179を参照。
- 16) 佐々木美智子, 「日米文化交流の先駆者」, 『駆』新潟県群像3, 新潟日報事業社, 1987, pp. 54-87を参照。
- 17) 平川節子, 「アメリカと日本における杉本鉞子の『武士の娘』」, 東大比較文学会編『比較文化研究』第63号, 1993, 恒文社, pp. 40-56を参照。
- 18) 多田建次, 「『武士の娘』杉本鉞子」, 『学び舎の誕生—近世日本の学習諸相—』, 玉川大学出版部, 1992, pp. 163-204を参照。
- 19) 青柳保子, 「杉本鉞子研究—『武士の娘』に書かれなかったことその一—」, 『長岡郷土史』31号, 長岡郷土史研究会, 1994, pp. 120-136を参照。
- 20) 新潟テレビ21, 『杉本鉞子の生涯』, 新潟テレビ, 1995年12月25日放送。
- 21) 渡, 前掲, 1967, pp. 114-132を参照。
- 22) 杉本, 前掲, 1994, p. 145.
- 23) Sugimoto, 前掲, 1995, p. 173.
- 24) 杉本, 前掲, 1994, p. 161.
- 25) 同上。
- 26) 同上, pp. 165-166.
- 27) 同上, pp. 242-243.
- 28) 同上, p. 162.
- 29) 同上。
- 30) ベネディクト, ルース (長谷川松治 訳), 『菊と刀』, 社会思想社, 1993, p. 341.
- 31) 同上, p. 343.
- 32) 杉本, 前掲, 1994, p. 171.
- 33) 同上, p. 174.
- 34) 杉本鉞子, 「若き婦人に望む事ども」, 『婦人新報』第207号, 1914, pp. 1-5を参照。
- 35) この手紙は、1992年11月14日に大久保きぬよ氏が「国際人 鉞子『武士の娘』の周辺」と題して講演した時に紹介したものである。長岡史楽会, 『長岡史楽会レポート—知られざる杉本鉞子資料—』, 長岡史楽会, 1995, p. 21より引用した。
- 36) 杉本, 前掲, 1994, p. 377.
- 37) 同上, p. 378.
- 38) 同上。
- 39) この研究は、1991年、東京都教員研究報告として授業記録ビデオと併に発表された。箕浦康子, 『地球市民を育てる教育』シリーズ 子どもと教育, 岩波書店, 1997, pp. 163-179を参考に引用した。
- 40) 箕浦, 前掲, 1997, p. 181.
- 41) 小林哲也, 『国際化と教育』, 放送大学教育振興会, 1995.

- pp. 197-201 から要約・引用.
- 42) 杉本, 前掲, 1994, p. 375.
  - 43) アメリカ研究資料センター 30 周年記念公開シンポジウム「多文化主義とアメリカのアイデンティティ」, 1997 年 11 月 15 日, 東京大学駒場校舎於.
  - 44) マージナルマンの概念は, 異民族の接触と文化葛藤の問題に取り組んだシカゴ学派のパーク (Park, Robert Ezra) によって 1928 年に初めて提出された. 現在, 日本においては帰国子女のアイデンティティ等を述べるときに用いられることが多い.
  - 45) 多田, 前掲, 1992, p. 199.
  - 46) 同上, p. 202.
  - 47) 杉本鉦子, 「武士の娘の見たアメリカ (3)」, 『婦人之友』3 月号, 1940, p. 168.
  - 48) 天野正治「ドイツの学校における異文化教育」, 『異文化間教育』No. 12, 異文化間教育学会, 1998, p. 45-63 を参照.
  - 49) 日本で一般に国際理解教育と呼ばれているものは, ドイツにおける異文化間教育と概念が類似している.